

2025年度 目白大学

入学式 式辞

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。教職員を代表して、ここから歓迎し、お祝い申し上げます。またご父母の皆様、ご家族の皆様にもここよりお慶びを申し上げます。

目白大学の母体の目白学園が誕生したのは大正12年(1923年)のことです。ですので、一昨年の2023年が学園創立100周年でありました。研心学園という専門学校から、男子の商業学校としてスタートした本学園に、4年生大学が現在のさいたま市岩槻区に誕生したのが1994年で、大学の創設という点から見ると31周年ということになります。現在の人間学部と社会学部の前身である人間社会学部が新宿キャンパスに出来たのが2000年で、その後、学部、学科、研究科を増設し、現在では大学8学部16学科、大学院7研究科11専攻の総合大学となっております。本学では創立100周年を機に、また新たな100年に向けてのスタートを切っており、縁あって本学に進まれたみなさんを大学の新しい100年へと進む目白大学に迎えられたことを大変うれしく思っております。また、みなさんと共にこの新しい年度をスタートしていきたいと考えております。

本学の建学の精神は「主・師・親」で、これは学園の創設者佐藤重遠先生が日蓮の『閑目抄』という本から採った言葉です。ですから本来は仏教の言葉ですが、この「主・師・親」の三つの文字が表す言葉の意味は大変奥が深く、佐藤重遠先生の後、学園を受け継いだ本学の先輩の教員たちも、その意味するところを研究して来ました。本学のホームページにもその現代的な解釈が載っているのはご覧になった方も多いと思います。それを少しわかりやすく言えば、「主・師・親」とは、人が尊重すべき三つの徳であり、「主」は自分が生きている社会を守り、また社会に貢献すること、「師」は、知恵を大事にして、また人を導き自らも学ぶこと、「親」は人を慈しみ、愛情をそそぐこと、と解釈できます。

創設者佐藤重遠先生は、宮崎県の貧しい小作農の元で生まれ、普通ならばとても上の学校には進めない家庭でした。しかし幼い時から勉学に優れ、その才能を惜しんだ学校の先生を取り計らいで、裕福な家に住み込みで働きながら、難関の地元の延岡中学校に進み、さらに同じように中学校の先生の推薦で、東京に出て、第一高等学校から東京帝国大学を卒業したという努力家です。その重遠先生が実業界から政治の世界に入ったところ、東京では学校不足に悩み、当時は義務教育でなかった中学校に進める生徒が進学希望者の四分の一程度という状況でした。重遠先生はなんとか若者に勉学の機会を広げたいと考えて、方々を奔走して作ったのがこの学園です。初めは少ない人数でしたが、勉強をしたいという若者が集まってきて、学園は大きくなっていきました。それは、自分が貧しい生まれで、周りの人に助けていただきながらお世話になったお陰で勉強の機会が与えられた、そして今があるというこ

とを強く感じ、社会に役立ちたいという気持ちがあったからだと思います。社会に役立ち、貢献すること、これが「主」です。そして、この学校で、知恵を磨き、また学問を授けてくれる人を敬うこと、これが「師」です。また、学生生徒たちに愛情を持って育てること、これが「親」です。そして、それを実現し、重遠先生の主師親の精神を受け継いでできたのがこの目白大学です。その精神を持って教職員すべてはみなさんを迎えますので、縁あってこの本学を選ばれたみなさんにも、同じ精神を忘れずに学んでいただきたいと思いますと考えております。

本学に入るにあたって、みなさんをお願いしたいことは、自分自身の目標を持ち、それをいつも頭に入れておくこと、そしてその目標の実現のために、大学での学修を第一と考えて正面から向き合っていただきたい、ということです。自分の目標はまだはっきりしていないという人は、それを先のこととは思わず、毎日それを探していただきたいと思います。

そこで私は、目標を持つためには、もうひとつ大事なことがあることに気付きました。それは希望を持つということです。希望を持って未来の目標に向かわなければ、その実現は難しいと気付いたのですが、現代の社会は若い人が希望を持ちにくい社会になっている、という指摘もあります。よくよく考えて見ると、この目標を持つことと希望というものは密接に関わり合っているものだということに気付きました。

東大教授の玄田有史さんは、かつて希望学というものの創設を唱え、『希望のつくり方』という本を2010年に出しています。もう15年も前に書かれた本ですが、私はこの本に書かれていることが、今こそ、大事になっているのではないかと思います。その本で玄田さんは、若者に対して軽々しく「希望を持て」とは言わない、と言っています。玄田さんは安易にこの言葉を使うことを戒めて、しかし、注意して使えばこの希望は未来に向かって進む大きな力になる、とおっしゃっています。そして、希望を持てと言う代わりに、希望を作るためのヒントを掲げています。それについて、少しお話ししたいと思います。そのヒントとは、次に言う英語の表現です。

Hope is a Wish for Something to Come True by Action.

つまりは「希望とは、行動 (Action) によって、実現 (Come true) すべき何か大切なもの (Something) を求める気持ち (Wish)」くらいの意味でしょうか。

この、行動 (Action)、実現する (Come true)、大切なもの (Something)、気持ち (Wish) の4つが希望の柱だと言うのです。

ただ希望を持てというのではなく、そのように分解して考えるほうが私も良いと考えました。

4つのうちの一つ目はウィッシュ (Wish) で、日本語にすれば「気持ち」とか「思い」「願い」と呼ばれるだと思います。たとえばオリンピックなどのスポーツで、決戦を前にした選手が、「こうなったら、もう技術がどうのこうのではない。最後は気持ちの問題だ」と言ったりしますが、この「気持ち」「願い」といものが、希望にはまず必要だと言っています。

二つ目が、自分にとっての大切な「何か」、サムシング (Something) ということで、つまり、将来こうありたい、こうなってほしいという、何か具体的なことがあるということです。

その何か、もちろん、自分が目指している資格を取ること、自分が対象としている外国語を習得すること、という人もいれば、とにかく三度のご飯が食べられれば良いという人もいるかもしれません。重要なのは、何かをしたいという自分にとって大切な何かを見定めることです。何でも良いから、何とかやってほしいという時は、だいたい何ともなりません。

三つ目の柱は、カム・トゥルー (Come true)、「実現」です。ドリームズ・カム・トゥルーは「夢が実現する」という意味ですね。どうすれば、実現する方向に近づいていくのか。そのための道筋や、踏むべき段取りを考える、そのことが大事です。たとえ実現が初めはむずかしく見えても、近づくことはできます。どうすれば望みがかなえられる可能性が高まるのか。そのために日々学習をし、また情報を集めることが大切です。

最後の四つ目の柱はアクション (Action)、つまり「行動」です。どんなに目標を定めて、すばらしい戦略を立てたとしても、そのための行動をしなければ、希望をかなえることはできません。行動を起こすことは、ときに勇気が必要であったり、あるいは不安や苦しいこともあります。むしろそれが普通だと思います。でも行動を起こさない限り、状況を変えることはできないとも言っています。

私はこの玄田さんが言う4つの柱を、今、完全に手にしていなくても良く、それを頭に抱いて大学生生活を送ってほしいと思っています。それがすなわち、みなさんが卒業後に望むもの、希望するものにつながると考えています。

しかしながら、現代は昔とは比べものにならない情報社会となり、さまざま情報機器の中で私たちは暮らしています。その中で、自分の目標や希望を見失わないうちということは、容易なことではないと思います。この10年ほどでインターネットや、媒体としてのパソコンやスマートフォンが飛躍的に発達し、XやInstagramやLINEなどのソーシャルネットワークサービスで、誰もが情報を受け取る側だけでなく、発信する側にもなれるようになりました。しかし、いつの間にかそうしたものに時間を取られやすくなっていることもあるかもしれません。さらにこの2年ほどでしょうか。AIの進歩がめざましく、特に生成AIというものが一般の人でも使えるようになって、人々の生活のありようや、社会のあり方まで、おおげさでなく大きく変化しているように思われます。

昭和の時代、特にその高度成長期には、最も新しい情報を伝えてくれるのはテレビでした。テレビは情報とスピードという面で群を抜いていて、非常に惹き付けられるもので、私たちが子どもの頃は、テレビばかり見ているといろいろなことが疎かになり、勉強もできなくなると言われたものです。

今、そのテレビにはば取って変わっているのがインターネットで、YouTubeやTikTokなどの動画視聴に多くの若者が時間を割いているようです。内閣府の最新の調査では、高校生の一日あたりのネット利用時間の平均が6時間14分で、その90%は動画視聴だということです。動画には学習用の動画も含まれていると思いますが、受験を控えている高校三年生がそんなに動画を見ているとは思えませんが、それにしてもデータとしてかなり長時間、パソコンやスマホで動画を見ていることは事実のようです。

しかし、多くの方は、それほど明確な目的もなく長時間の動画視聴をしているのではないかと思います。その結果、いつの間にか動画の内容が頭の中を占めてしまい、常にそれに時間

を取られていれば、自分がもともと何をしたかったのか、何を目標にしていたのかがだんだん遠くに行ってしまうのではないかと心配します。みなさんは目白大学に入学が決まってから後、多くの人が春休みということで時間があつたと思いますが、その間どのようにお過ごしになったでしょうか。

今日からみなさんは目白大学の一員となりました。これからそれぞれの学部・学科での学修に入りますが、まず気持ちの上での準備をしてください。本学に入りたいと思った、その自分の気持ち Wish をもう一度思い返してください。入学式が終わったら、各学科・研究科でガイダンスがありますが、それを受け身で聞くのではなく、これから自分はどんなことをするのか、大学にはどんなことがあるのだろうか、自分の大切なもの Something に関わるのは何だろうかと考えてください。入学前に本学の入学案内をみなさんは手に取ってくださったと思いますが、もしそれを捨てないで取っておいてあれば、家に帰ってからもう一度、自分の学科のところを読んでください。本当は春休みにしてもらいたかったのではあります。今日で良いのでやってみてください。そしてこれからの大学生活を思い描いてください。

それから、一番大事なことが、最後の行動 Action です。先ほど言ったように希望を持つということは、実際のところ、何か不安があつたり、苦しいことがあつたりするから持つのではないのでしょうか。ある意味当然のことだと思います。初めから幸福が実現していたら、希望など持つ必要はないと思います。むしろ幸福を維持するのにまた大変かもしれません。ですので、そうした不安があつても当たり前なので、これからのためにとにかく行動を起こしてください。

大学の中での行動とは、つまりはまず学修です。教室の中だけでなく、実習やフィールドワーク、インターンシップなど、本学は学外での学修にも力を入れています。ぜひそこで経験を積んでください。カリキュラムの中にあるものを、ただやらなければいけないもの、しかたなくやらされているもの、と捉えるのではなく、自分の希望を叶えるためのものとして捉えてください。

それから学生会や、桐和祭・桐葉祭実行委員会、オープンキャンパスをサポートするメジスタ、あるいはサークル活動や体育系のクラブもあります。そうした活動も重要な要素です。大学が始まったら、そうした活動の紹介や勧誘があるかもしれませんが、迷ったら思い切ってやってみる方を取ってください。つまり Action を起こしてください。そこでは教室では得られない友人や色々な経験を得ることができるかもしれません。初めはうまく行かなくても、たとえば何かちょっとした失敗があつても、必ずそれはあとで自分のためになります。うまく行かなかつたら、そこで落ち込むのではなく、その経験をしたことが次に生きるのだと考えれば良いのです。この入学式の最後に、あるサークルの発表を用意していますが、その学生さんたちも希望を持って未来に進んでくれている、そういった姿を見せてくれると思います。

希望と似た言葉に夢という言葉があつて、それは日本語では良い意味ではありますが、夢というのは個人的なニュアンスが強いと思います。それに対して、希望はもう少し社会との関わりがある、そのように玄田さんは言っています。玄田有史さんが考えた希望学というの

は、つまり希望の社会学ということです。玄田さんは、さらに希望を共有することの重要性を述べていて、社会的な希望をお互いに共有して、そして先ほどのように行動によって実現に向けての何かを求めていく、そのようにおっしゃっています。つまり、まわりと関わることで、みなさんの希望はより叶えられると考えてくだされば良いと思います。それを目白大学の中でやってください。

現在の目白大学には、8学部16学科、大学院7研究科11専攻があります。それぞれの学科、研究科の特徴によって目指すところは違いますが、自分の目標を定めて、勉強を行ってください。もし、何かうまくいかないことがあって、あるいは進みついていけない、と思ったことがあれば、その自覚が進歩の始まりだと思ってください。そして、そういう時こそ目白大学の教職員を頼りにしてください。私たちは全力を挙げて、みなさんの成長に手をお貸しします。

近代大学の起源のひとつは、イタリアのボローニャというところで、ボローニャには昔から有名なローマ法学者が集まっておりました。法律を学びたいという学生が集まってきたことが始まりです。大学のことを英語で university と言いますが、もともとの語源は universe の「宇宙」ではなく、「組合」という意味です。uni には1つにするという意味があって、ひとりひとりが偉い先生にばらばらにお金を払って、それぞれが教えてもらっているは大変なので、学びたい人たちが集まって学費を集め、先生方を雇い、そこで勉強するという「組合」を作ったことが大学の起源です。歴史で習った人も多いと思いますが、大学というのは、自分が勉強したいという希望を持った人が集まって自主的に作ったものが始まりです。

それに対して日本の大学は、明治時代に近代化を行い、国を発展させるために、国が人材を育てようとしたことが始まりで、既にできている大学に自分が入る、という意識だと思います。しかし、授業の課題などで大変だと思ったりした時、何かの理由により寝不足で大学に行かなければいけないと思った時は、もともとは学びたい人が希望を持って集まった場所ということをお願いしてくださると良いと思います。先ほど言ったように、義務としてやらされているのではなく、自分たちが学ぶ、そういった意識で関わっていく、そういう気持ちを持って自ら勉強に取り組んでいただきたいと思います。

本学は「育てて送り出す」ということを社会的使命として掲げていますが、それは学生のみなさんから見れば、学びの中で成長して、そして社会に出て行く、それを私たち教職員が手助けをするということになるかと思います。

佐藤重遠先生が大事にした「主・師・親」の考えは、知恵と愛情を持って、社会に対して関わり、貢献していく人材を「育てて送り出していく」という本学のモットーに他なりません。どうかみなさんも、そうした精神を受け継いで、学修によって自分を成長させ、希望を持って自分の価値を高めるために大学生活および大学院の生活を充実させていただきをお願いし、これを以て学長の式辞といたします。

2025年4月2日

目白大学学長 太原 孝英